

主 題：忠実なしもべでありたい
聖書箇所：詩篇 139 篇 19－24 節

今日は詩篇 139 篇です。イスラエルのダビデ王について、私たちはごいっしょにみことばを見て行きます。主はダビデをどのように評価しておられたのか、神はどのようにダビデを見ておられたのか、ご存じでしょうか？ダビデの信仰、その生き様、歩みは私たちに模範を示しています。

☆ダビデに対する主の評価

「使徒の働き」の中にダビデのことがこのように言われています。使徒 13：22「それから、彼を退けて、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になった者と、わたしのころを余すところなく実行する。』」と。間違いなく、神はこのダビデのことを喜んでおられます。なぜなら、彼は神の心になった人であるからと、そのように聖書が教えているからです。預言者サムエルがサウロ王に対して「今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心になう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命じられたことを守らなかったからだ。」（I サムエル 13：14）と言いました。サウロよ、あなたは悲しいことに、王でありながらわたしの心になっていない。だから、あなたの王国は建たない。神が求めているのは、ご自分の心になう人であるということです。そして、神はそのような人を見つけたのです。ダビデでした。彼は神の心になった者だったからです。言い方を変えるなら、主なる神の心と同じ心を持っている人です。神のお考えになっていることが自分の考えであり、神の喜びが自分の喜びであり、神の悲しみが自分の悲しみである人、そのような人です。それが主が喜んでくださる人です。

このような信仰者として生きたダビデ、このような歩みの起因となったのは何だったのでしょうか？いったい、何がそのような歩みを彼にもたらして行ったのでしょうか？それは神に対する恐れです。主への恐れです。ちょうど、モーセが死を迎えようとしているとき、ヨシュアを立てて、イスラエルの新しい民がヨルダン川を渡って約束の地に入ろうとしています。その時にモーセがこのようなことを言います。申命記 31：13「これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならぬ。」と。モーセはこれから新しい約束の地に入っていく者たちに対して、リーダーに対して、私たちがしなければいけないこと、自らもそうであるし、そして、子どもたちにも教えなければいけないことは「神を恐れること」だと言うのです。もちろん、これには、私たちが聖い正しい神の前に常に生きているという事実が私たちを震えさせます。

今、私たちはそのことを見て行きますが、聖い恐れというものを抱きます。しかし同時に、この恐れとは神を怖がるというよりも、神を愛するがゆえに神に対して深い畏敬の念をもつという、そのことも当然教えるのです。ダビデは主を恐れる人でした。だからこそ、彼は主のお心を持って生きることができたと言えると思います。神をいつも恐れていたから聖い神に喜ばれることを考えるし、神が喜ばれることを選択するし、また、それと逆のことは自ら遠ざけて行こうとするのです。

確かに、多くの人たちに愛され尊敬を得ているこのダビデ、どうしてこのような人物として彼は成長して行ったのでしょうか？その鍵になることがこの詩篇 139 篇のダビデ自身書いたそのみことばの中に記されているように思います。願わくは、今日、私たちがこのダビデの信仰を見て行くことによって、あなたもそして私自身も、彼がそうであったように、神を喜ばせる者として成長したいものです。神が求めておられるような神の心になった者として、神の栄光をますます現わして行く、そのような者として成長したいものです。秘訣を見て行きましょう。

まず、簡単に言うなら、ダビデは自分の神のことをよく知っています。その知識が神に対する正しい恐れをもたらしたのです。私たちはよく言います。「あなた、よく状況が分かっていないね…」と、分かっていたらもっと違う行動をするからです。違いますか？状況が飲み込めていない、つまり、その人の行なっていることが相応しくないからです。状況が分かってそれに相応しい行動をするのであれば、私たちも神がどのようなお方であるかということを理解すればするほど、それは間違いなく、私たちが相応しい行動へと導くはずで

A. ダビデの神 1－18 節

ダビデは自分の神について、この 139 篇の 1 節から 18 節に三つのことを私たちに教えています。彼は私の神はこのような神だと言います。「:7 私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあ

あなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。：8 たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。：9 私が暁の翼をかけて、海の果てに住んでも、：10 そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。：11 たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。私の回りの光よ。夜となれ。」と言っても、：12 あなたにとっては、やみも暗くなく夜は屋のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。：13 それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちに私を組み立てられたからです。：14 私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。：15 私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。：16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。：17 神よ。あなたの御思いを知るのとはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。：18 それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。」

1. 全知の神 1－6節

1－6節「：1 主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。：2 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。：3 あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。：4 ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。：5 あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。：6 そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません」、

- ・ 私たちの行動＝2節、神は私の歩みだけでなく、私のすべてを見守っておられ、私の歩むその道をことごとく知っていると言うのです。申命記6：7「これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。」
- ・ 私たちの考え＝3節、私たちが歩んで行くときは当然物事を考えます。ですから、私の神は「私の思いを遠くから読み取られます。」とある通り、私の考えていることをみな知っていると言うのです。
- ・ 私たちの話＝しかも、4節には私たちの会話のすべても知っていると言います。「ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。」と。ですから、神の前に内緒話はないのです。私たちが口からどのようなことばを発しようと思えば、神はすべてを見ておられるのです。それが神です。それだけでも私たちを震えさせませんか？「神さま、少し勘弁してください。その恵みだけをください。ここだけは、耳をふさいでいてください、目をおおっていてください。」はできないことです。ダビデは「私の神は私のすべてを知っているお方だ」と言います。
- ・ 私たちの必要＝5節を見ると、「あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。」とあります。祝してくださっているのです。神は私のすべての必要を知って私を守り祝してくださっているのです。

皆さん、少なくとも、この神があなたのすべてを知っているという事実は、あなたに大きな喜びをもたらすか、大きな恐れをもたらすかのどちらかです。ある人たちは一生懸命神のために生きて人々に理解されません。でも、神がすべてを知っておられるということはこの上もない慰めです。なぜなら、あなたが神の前に立った時に、人々は知らなかったけれど、すべてを知っておられる神があなたのその信仰にに応じて相応しい祝福をくださるからです。それは信仰者にとって大きな希望です。人々が誤解しても人々が理解してくれなくても、評価してくれなくても、すべてを知っている神が正しい評価をくださるのです。しかし、私たちがどこかで二面性を持っているなら、つまり、教会の顔と普段の顔、あるいは、教会の顔と家の顔と、もし、そうであれば、教会に来るときはよそ行きの顔をしているかもしれません。信仰者らしい仮面を付けて来るかもしれません。でも、神はあなたの本質を見ておられるのです。これは恐ろしいことです。もし、あなたがそうなら、その罪を悔い改めて神の前を正しく生き続けることです。ダビデと同じように。私の神は私のすべてをご覧になっているから「私はこの方の前に隠せるものは何一つない」ということを覚えなければいけないのです。

2. 遍在の神 7－12節

「どこにでもおられる神」ということです。7節「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。」と、つまり、どこへも逃れることはできない、どこへ行ってもあなたは神の前に立っているというのです。宇宙の果てに行っても、神の臨在から逃れたわけではありません。どこへ行こうと神はちゃんとあなたを見ているというのです。

- ・ 天にも地にも主はおられる＝8節「たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。」、天にあっても地にあっても、また、よみに下ったとしても、神がおられないところはないと言うのです。

・ 東から西へ行っても主はおられる＝9節には「私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、」とあります。「暁」とは夜明けのことです。ある人はこれは「東」を指していると言います。そうすると、これらは対照、対比されているので、「海の果て」とは西です。10節「そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。」

・ 昼でも夜でも＝11－12節「たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。私の回りの光よ。夜となれ。」と言っても、12 あなたにとっては、やみも暗くなく夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。」、昼であろうと夜であろうと、主は常にあなたとともにいると言うのです。神の目の届かないところはどこにもないのです。

これらにも二つの反応があります。ある人々にとってはこれ程の慰めのことばはありません。いつも神が私とともにいてくださるということは、私たちにとって大きな慰めです。一人ぼっちではない、行く所どこにおいても主がともにいてくださる。その方が励ましをくださり、その方が力をくださり、その方が知恵をくださって、神は私たちを用いてくださるのです。「わたしはあなたを離れずあなたを捨てない。」というみことばは慰めです。感謝なことです。

しかし、主がともにいるということは、ある人にとっては恐ろしいことです。なぜなら、あなたが罪を犯しているときにも主はともにおられるからです。

3. 創造の神 13－18節

・ いのちの源＝13節「それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。」、そのようにあなたは造られたのです。「組み立てられた」ということばは「覆う、かぶせる、織る、機で織る、糸を編んで織物を作る」という意味です。そのようなことばが使われています。神がダビデを母の胎の中で織られた。縦糸と横糸を織り合わせて見事な絵柄を作るように、神は母の胎にあって特別に見事に造ってくれたと言うのです。明らかに、私たちの神はこのようにしてあなたを特別に造ってくださったのです。エレミヤ書1：5でエレミヤはこのように記しています。「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」、すごいメッセージです。神はエレミヤに対して「あなたを胎内に形造る前から、」と、神は母の胎にいますときから働いておられたのです。私たちをこのように造ってくれたのです。すべて神のみわざです。

感謝＝14節、ダビデは神に感謝をささげています。非常にすばらしい真理が記されています。「私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。」と。「感謝します」ということばの後に理由を表わす前置詞が付いています。つまり、なぜ感謝するのか、その理由を述べているのです。自分自身が造られたことを感謝しているのですが、特に、その創造のみわざに関する感謝を述べるのです。

・ 恐ろしい＝「怖い」という意味ではありません。その人のうちに「畏敬」の念を起こさせるお方です。つまり、自分が造られたその創造のみわざを見る時に、私たちは造ってくださった方に対して畏敬の念を抱く、そのことを言うのです。

・ 奇しい＝あなたの為してくださった創造のみわざは非常にまた、大いにすばらしいものだと言います。「奇しい」とは「区別する」と訳せることばです。ですから、他のあらゆるものと区別されている、私たち人間は他の動物と区別されています。全く違うものです。そのような意味もあることばを使っているのです。

ここでダビデが言わんとしたことは「神であるあなたは私を驚きのみわざで、私をすばらしく造ってくださった。」ということです。ですから、ダビデは自分を造ってくださったその神の創造のみわざに心からの感謝をしているのです。

信仰者の皆さん、もしそうでなかったとしても、私たち一人ひとりはそのことを神に感謝しなければいけません。みことばが私たちに教えていることは、あなたは神によって特別に造られたということです。あなたを造られた神のみわざは驚きのみわざでしかありません。だから、自分たちのからだを見ると、私たちはその精巧さに精密さに驚かされるのです。そして同時に、私たちは感動するのです。なんとすごいものを神はお造りになったのだろうと。

ですから、ダビデが14節で言っていることは、あなたは私を驚きのみわざで、また、すばらしく造ってくれた、そのことを知っていたゆえに、彼は神に感謝したのです。それが理由だったのです。詩篇40：5にもこのように記されています。「わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。」、あなたが為されたそのすばらしいみわざは、数も知れず、あなたに並ぶような人はいないとダビデは言います。私たちがこのように生きていることは、神のすばらしいみわざです。神は私たちを

特別に造ってくれました。この世の中に二級品はいません。すべて一級品です。最高のものとして神が造られたのです。そのようにダビデは知って、そのことを神に感謝しているのです。

- ・ **胎内での子どもの成長を詩的に記した**＝ 15－16 節を見ると、「私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。：16 あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。」と、ダビデは胎内での子どもの成長を詩的に表わしています。
- ・ **神が私たちのことを考えてくださる**＝ 17－18 節「神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。：18 それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。」

今、私たちは簡単に、ダビデ自身がなぜ神に対して深い愛を持っていたのか、その理由を見て来ました。それは彼自身が自分の信じる神を知っていたからです。こんなにすごい神によって、私は造られ、私は救いに至り、そして、この神とともに私は永遠を過ごすことができる。その事実が彼の心を感動させ、喜びに満ち、そして、その心が神に喜ばれる者として生きて行きたいという動機となり、実際の行ないを生み出していったのです。私たちの信仰生活において「主を知ること」がいかに大切かが分かります。「主を知ること」によってダビデはこのように変えられて行ったのです。

B. ダビデの願い 19－22 節

さて、19－22 節を見ると、ここにはダビデの願いが出て来ます。よく見ると、神に対してそのすばらしい創造のみわざを感謝していたダビデに相応しくないことを語っているように思いませんか？「悪者を殺してください。」というようなことばを聞くと、私たちはどうも首をかしげたくになります。なぜ、ダビデはこんなことを言ったのでしょうか？実際に、このようなことを語っている箇所、たとえば、詩篇だけを見てもたくさんあります。詩篇 33 篇、58、59、83、109、137 篇にも出て来ます。このように繰り返して神にさばきを求めているみことばがあります。私たちはみことばから「赦すように」と教えられています。そうすると、なぜ、このようなことをダビデは祈っているのだろうと、そのように思ってしまう。

そこで、ぜひ見ていただきたいのは、これはダビデ自身の個人的な恨みや怒りが記されているかどうかです。「あの人のことが嫌いで憎くて仕方がない、神さま、どうぞあの人を早く処分してください。さばいてください。」と、そのようなことが記されているのかどうかです。違いますね。彼が何かしようと言っているのではありません。19 節「神よ。どうか悪者を殺してください。」と、なぜ、このような表現を使ったのか？これは彼自身の憎しみから出たことばではなくて、神のことを考えて彼が発言しているのです。ダビデが考えたのは神のお心です。神が悲しまれることが自分にとっても悲しみだったのです。ですから、彼は神が憎まれることを自分も憎んだのです。そのことは後で少し説明します。

1. 神を愛していた

a) ダビデは彼らの悪を見た

ダビデは神を愛していました。そこで、この人々を見たのです。19 節に「悪者」とありますが、これは「邪悪な人たち、非難されて当然な者たち」のことです。また、19 節の後半には「血を流す者どもよ。私から離れて行け。」とあります。罪なき者の血を流したり、殺人を働いたりする者たちです。これらの人々の特徴は、常に、神に逆らい続けていることです。創造主なる神を心から崇めようとしません。この神を無視して彼らは生きているのです。19 節に「神」ということばが出て来ます。これは、この 139 篇にも使われている「主」、「ヤーウェ」ということばではありません。ここでは「エル」ということばが使われています。「力がある、強力な」という意味です。

もしかすると、この神に逆らい続けている者たちは、自分たちの力でこのようなものを築き上げたとか、自分たちの力でこのようなことをしたと、自らの力を過信していたのかも知れません。彼らは力の源である全能なる神を全く無視して、そして、その神に逆らい続けているのです。彼らがしていることは、この神を憎むことです。それが証拠に、今私たちが見て来たように、この「悪者」ということばも「血を流す」ということばもどちらも神が忌み嫌われることです。彼らはそれを愛しているのです。そして、そのようなことを追い求めているのです。ですから、ダビデはただやみくもに彼らのさばきを求めたのではないのです。彼らに愛を示した、しかし、彼らはそれを拒んでいるのです。

例えば、詩篇 109 篇 4－5 節にも、そのことがこのように記されています。「彼らは、私の愛への報いとして私をなじります。私は祈るばかりです。：5 彼らは、善にかえて悪を、私の愛にかえて憎しみを、私に報いました。」、ダビデが人々に愛を示しても、彼らはその愛に答えようとしないのです。彼らはひたすら、神の前に忌み嫌われることを求め続けていたのです。

b) 神の敵を自分自身の敵として見た

明らかに、この神に逆らう者たち、神の敵たちをダビデは同様に彼らを自分の敵と見たのです。神がご覧になっているように見たのです。このようなことはダビデだけでなく、あのエレミヤもそうでした。

- ・エレミヤ＝エレミヤ書 11 : 18 「主が私に知らせてくださったので、私はそれを知りました。今、あなたは、彼らのわざを、私に見せてくださいました。」、15 : 15 「主よ。あなたはご存じです。私を思い出し、私を顧み、私を追う者たちに復讐してください。あなたの御怒りをおそくして、私を取り去らないでください。私があなたのためにそしりを受けているのを、知ってください。」、18 : 19 「主よ。私に耳を傾け、私と争う者の声を聞いてください。」
- ・パウロ＝パウロもガラテヤ 1 : 8－9 で「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。：9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。」と言っています。
- ・主＝また、イエスご自身もたとえの中ですが、たとえを用いてこのように言われました。ルカ 19 : 27 「ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』」、マタイ 21 : 40－44 「このばあい、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」41 彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』：43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。：44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」、同じマタイ 22 : 7 「王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。」と。神のみこころを求めてそれを喜んで受け入れるのではなく、それに逆らっている者たち、この神に逆らう者たちに対して、神は彼らのことを「敵」と呼ばれるのです。

c) 罪を犯している者への教え

ですから、私たちが今日のテキストを見たとき、私たちも神の敵に対してどのような態度をもって接すべきかを考えて見る必要があります。

(1) 未信の人々に対して

たとえば、私たちがイエスを信じていない未信の人と接するとき、私たちはどうすれば良いのでしょうか？ 私たちは間違いなく愛をもって接します。というのは、イエスもマタイの福音書 5 : 44 で「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」と言われました。ローマ書にも「復讐してはいけません」とあります。12 : 19－20 「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」：20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。」。ですから、私たちは周りにいるイエスを信じていない人たちに対して、キリストの愛をもって接して行くのです。彼らを憎むのではなく、彼らのために祈り、彼らの救いのために最善を尽くすのです。

(2) 信者に対して

信者の場合はどうでしょう？ I コリント 5 : 9－11 「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。：10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。」、これは未信者のことではありませんと言います。10 節で「不品行な者」とパウロが言ったのはクリスチャンのことです。ですから、11 節「私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけな、いっしょに食事をしてはいけな、ということです。」と、みことばは明確です。私たちは罪を犯しているクリスチャンたちに対して、それが「罪」だということを明確に示さなければいけないのです。それで彼らが悔い改めるなら兄弟を得たことになりませんが、そうでないなら、私たちはその罪を責めなければいけないのです。それでも聞き入れなかったら、究極的に、彼らを交わりから断たなければいけません。何のためですか？ 彼らが罪に気付いて立ち返って来るためです。私たちは個人的な憎しみからそのようにするものではありません。彼らは神の前に正しく歩まなければその人生は虚しいことを知っています。クリスチャンだと称していながら、神に逆らっている者たちがいるなら、彼らのことを愛すれば愛するほど、彼らに対してその罪を悔い改めなさいと勧めなければいけないのです。それでも、彼らがその罪から離れようとしないなら、残念なことで

すが、私たちはこれまでと同じ交わりを持つことはできません。私たちはその交わりを断たなければいけません。彼らが主に立ち返るためです。

でも、そのように実践することが非常に難しいこと、この実践の妨げとなるものは私たちの「情」です。「そんなことをしたらかわいそう…」という私たちの情がその心を妥協させてしまうのです。問題は「神を愛するかどうか」です。

今日、ダビデは私たちにこのように厳しいことを言いました。彼は個人的に彼らを憎んでいたのではありません。しかし、彼は神を愛するゆえに、その神に逆らい続けている者たちに対して、「神さま、彼らはあなたの敵であり、そして、私の敵でもある。」と、彼は人々のことよりも彼の神のことを思うのです。一貫していることは、彼はどんな時にでも神に喜ばれることがいったい何かを考えて、それを選択しようとすることです。だから、ダビデは神を愛していたと言えるのです。もし、私たちが「確かに神はそうに言われるけれど、私たち人間は…」と、情で流されてしまうなら、それは本当に神に対する、神が望んでおられる愛をもって神を愛していることになるのかどうかです。

信仰者の皆さん、神を愛するということは、私たちが神のみことばに神の助けをもらいながら従って行こうとすることです。ダビデがこのようなことを言ったのは、ダビデ自身が何か罪を犯していたのではありません。彼は神を愛するゆえに、その愛する神に逆らい続けている者、そして、何度も手を差し伸べても悔い改めようとしない者たち、しかも、なお神を冒瀆するような者たちに対して言ったのです。

2. 神の計画を知らなかった : 私たちのように完全な啓示をいただいていない

もう一つ説明しておかなければいけないことは、ダビデは神を愛していただけでなくて、神の計画を全部知らなかったということです。私たちには神のすべての啓示が与えられました。ダビデはそこまで与えられていません。ダビデが経験してきたことは、歴史を通して、神に従う者には祝福があるが、神に逆らう者にはさばきが下るとということです。そのように教えられて来ました。だから、ダビデは思ったのです。「この悪に対して神がさばきを下されないのはどうしてだろう？」と。だから、ダビデは祈ったのです。「神さま、あなたがこれまでなさったように、罪に対してあなたがさばきを下されたように、あなたにこのようにたて突き、あなたに逆らう者たちにどうぞさばきを下してください。」と。ダビデが分かっていたいなかったことは、神は忍耐をもって一人でも多くの罪人が悔い改めに進むことを待っているということです。神はいったい何をされているのだろう？と私たちも思いました。

私が何度も聞いたことですが、アメリカのことですが、今のアメリカはかつてのソドムとゴムラよりも罪が重いと言われました。それを聞いたときに「いえいえ、日本のほうがもっと重いです」と思ったことを今でも思い出します。「なぜ、神さまはさばきを下されないのだろう？神さま、早くさばきを！あなたがこれまで成して来られたこと、あなたの御名が汚されています！神さま、さばきを！」と、でも、私たちは言うのです。「神は忍耐をもって一人でも多くの罪人がこの救いに与ることを望んでおられる」と。Ⅱペテロ3:9からそのことを教えられます。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

つまり、ダビデが知っていたことと、私たちが今知っていることとは違うのです。その知識において、神が明らかにしてくれた量と、今私たちに明らかにされている量とは違うのです。だから、ダビデは自分が知っている中で「神さま、あなたがこれまでして来られたように、あなたに逆らう者たちにさばきを下してください。」と願うのです。ダビデ自身の願いは「神が喜ばれること」です。そのことしか考えていなかったのです。自分のことなどどうでもよかったのです。

C. ダビデの祈り 23-24節

この祈りを見ると、彼は自分がさばかれることを求めています。

1. 自分の心を探ってください

23節「神よ。私を探り、私の心を知ってください。」、1節にも「私を探り」とありましたが、ここでは「私の心を知ってください。」と言っています。というのは、ダビデは私たち人間の問題は心であることを知っているからです。彼は自分の心が聖くありたいと願いました。心が聖ければ良い行ないが出て来るからです。だから、ダビデは神の前に「どうぞ、私をさばいてくださり私の心を吟味してくださり、私の心が間違いなくあなたの前に聖くありますように。」と願っているのです。そのような人物だったのです。心が聖くあることを望んでいるのです。

2. 思い煩いを調べてくださること

「思い煩い」とは「心配や不安な状態にある思い」です。いろいろな気がかりです。それを調べて欲しいと言うのです。「私を調べ、私の思い煩いを知ってください。」、「調べる」ということばはテストして欲しいということです。なぜなら、様々なことで心が不安になるとき、心に心配事がいっぱい出て来ると

きに私たちは気をつけなければいけないのです。私たちにはその時が一番罪を犯しやすくなるからです。自らを誘惑にさらしているのです。しっかり神を見上げて安定しているときは問題ないのです。しかし、いろいろなことが起こって心が騒いでいるときに私たちにとって一番危険なのです。神の前に間違っただけの選択をする可能性があるからです。いろいろな問題があると、私たちは今まで神に対してもっていた信頼がぐらつき、また、そのようなときに神を見失ってしまったり慌ててしまいます。

ですから、ダビデはそのようなときに自分の思いをテストして欲しいと言うのです。心が本当に心配でいっぱいになった時に、思いが不安な状態に傾き掛けた時に、私の思いをテストしてくださいと言います。なぜ、そのように祈ったのでしょうか？神の前に正しい選択をしたいと願ったからです。神の前に常に正しい選択をしたいと彼が願っていたからです。どんな時にも、あなたが喜んでくださることを私は選択したいと願っていたのです。

3. 歩みが間違っていないかどうかを教えてください

24節「私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、」、「傷のついた」とは「深い悲しみ、傷付ける」ということばです。ダビデが祈っていることは、私のうちに神を悲しませることがないかどうかを探ってくださいということです。だから、ダビデはどれ程神を悲しませることを避けようとしていたのかが分かります。彼は明らかに、神を悲しませることを避けようとしていた人です。神を悲しませたくない、何とか神を喜ばせたいとしたのです。

4. 正しい「とこしえの道」を歩ませてくださること

24節「私をとこしえの道に導いてください。」とそのことを祈りました。明らかに、ここでは天国に入る道のことを話しているのではありません。「傷のついた道」と対比して、神が喜んでくださる歩み、罪から離れた歩みをしたいと願っていたのです。

ですから、この二つの節に出て来るダビデの祈りを見たときに、「神さま、どうぞ私をさばいてください。私の心があなたの前に聖くあるかどうか、私は聖くありたい！だから、聖くないものがあつたら教えてください。私の心がいろいろと思い煩うときに、神さま、どうぞ正しいことが選択できるように私の心を守って欲しい。あなたを悲しませることをしていないかどうか、あなたを悲しませることを私が語っていないかどうか、そのことを教えてください！あなたを悲しませたくないから。そして、あなたが喜んでくださることを私は選択して行きたい。」と、これがダビデの祈りだったのです。

結論

◎ダビデは心から神を愛していた

なぜ そう言い切れるのでしょうか？それは、彼自身の生活、生き様がそのことを証しているからです。

- ・詩篇97：10 a = 「主を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。」、悪から離れる、罪から離れる、それが神を愛している人の証拠です。そのことはみことばが私たちに繰り返し教えることです。
- ・箴言8：13 = 「主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりとおごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」
- ・箴言16：6 = 「恵みとまことによって、咎は贖われる。主を恐れることによって、人は悪を離れる。」

さて、ダビデ、神に喜ばれる人でした。なぜなら、彼は神の心になつた者だったからです。「使徒の働き」で教えたことはそれだけではなかったですね。使徒13：22「それから、彼を退けて、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行する。』」と、ダビデは神のみこころを徹底的に行おうとしたのです。彼は神に対して忠実に生きようとしたのです。だから、神は喜んでくださったのです。

◎忠実なしもべでありたい！

あなたはどのように生きておられますか？そのように生きたいと願いませんか？しっかりとあなたの神を覚えてください。そして、いつも自らのこころを吟味してください。神に祈りながら「神さま、私はあなたの前に喜ばれることをしたいから、どうぞ、いつも私の心が、私の考えること、私の選択、そのすべてがあなたに喜ばれるように。その目的のためだけに生きる者にしてください！」と、そのようにして私たちは生きて行くのです。ダビデがそうであったように。そのときに神はあなたに対して「あなたは「わたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行」した者だ。」と、そのように誉めてくださるのです。そのことをしっかりと覚えて、そのような歩みをもって神に従い続けて行きましょう。

《考えましょう》

1. 神を知ることがどうして信仰者には大切なのでしょうか？

2. 神を知っていることを証明するものは何だと思われますか？
3. ダビデは主に何を祈っていましたか？
4. どうして、ダビデはそのことを祈ったのでしょうか？
5. 「わたしの心になった者で、わたしのこころを余すところなく実行する人」とは、どのように生きる人かを具体的に書いてください。
6. あなたはこれからの人生をどのように歩んで行きたいと願われますか？